

図書ニュース

大阪府立北野高等学校
図書館

第3号

2016.7.15発行

そもそも『図書ニュース』とは、図書館蔵書の、図書館部教員による、北野生のための紹介メディアである。こうした性格の枠内で、発行担当者の創意工夫の余地は認められている。各号のテーマ設定もその限り自由であろう。

そこで私は、一昨年「書架e(社会科学)を巡って出会った本」、昨年は「分厚い本」というテーマを掲げた。かなり個人的な設定だったとは思うが、もう過ぎたことである。

今年4月、『北野生のための100冊』が大幅に改訂された。去年から全ての先生方に図書の推薦を依頼して、係による結構息の長い編集作業があったことも知っておいてほしい。私の推薦した3冊の本 — 後藤正治の『天人 — 深代淳郎と新聞の時代』・アルペール・カミュの『ペスト』・竹内洋の『社会学の名著30』 — もその選に入った。このうち最初の『天人』は今年のニュースで紹介済みである。そこで、今回は後の2冊を中心に取り上げたい。

がしかし。その前に『100冊』のような企画は本校史上いつ頃からあったのか、というまともや個人的な疑問が浮かんできた。さっそく『北野百年史』(厚さ10cm、本文1908ページ!!)を索引を頼りに繙(ひもと)く。そうしたら、百四十余年の歴史恐るべし。図書館に関する記事の初出が明治10年。当時は「大阪府書籍館」といわれ、設立の趣意書には「其レ書ヲ読メハ万倍ノ利アリ」とある。図書推奨の企画、即ち「中等諸学校生徒向良書目録」は明治40年にあることを発見した。(なお、本校図書館史については、1993年7月8日発行の『図書館報』第34号においてまとまった記載があり、バックナンバーのファイルで見ることができます。)

これは、文部省が「生徒をして誦読せしむるに適当な」書籍目録を作成して、各学校に配布したもので、文章(国・漢文)・和歌・新体詩・漢詩・歴史・伝記・小説・教訓・雑・雑誌・英書のジャンル別に計281冊が挙げられている。なかに夏目漱石の作品に出てくる『成功』雑誌が含まれている辺りは時代をよく反映していると思う。【注】太字の書名は図書館蔵書である。

① アルペール・カミュ『ペスト』(新潮文庫)(953/C1/11)

題名のペストは、ペスト菌の感染によって発生する急性伝染病で、黒死病という別名のように患者の多くは死亡するといわれ、近代の初めまでの幾度かの大流行はとくにヨーロッパの歴史と社会に重大な影響を与えた。小説の『ペスト』は、アルジェリアのオランという町を襲ったペストの流行と戦う市民たちの記録という体裁をとった物語である。印象的な言葉を抜き出そう。

物語の語り手でもある医者のリウーは、ペストに対する戦いは英雄的な行動などではない、「こんな考え方はあるいは笑われるかもしれませんが、しかしペストと戦う唯一の方法は、誠実ということです。」と言う。

最初、ペストの町から何としても逃げようとしていた若い新聞記者ランベールは、「僕はこれまでずっと、自分はこの町には無縁の人間だ、・・・そう思っていました。ところが、現に見たとおりのものを見てしまった今では、もう確かに僕はこの町の人間です・・・。この事件はわれわれみんなに関係のあることなんです。」そして、「自分一人が幸福になるということは、恥ずべきことかもしれないんです。」と言って、町に残りペストと戦う一員に加わる。

小説の最後。リウーは、ペストという天災のさなかでも、人間のなかには軽蔑すべきものよりも讚美すべきもののほうが多くあるとだけ言うために、また、圧倒的な天災の恐怖に対してただやり遂げねばならなかったとだけ証言するために、このペストとの戦いを記録しようとして決心したと述べている。読んでみて、この日本でも、多くの人々が東北や熊本などの被災地に思いを寄せ救助と復興への貢献をやり遂げねばならぬこととして、誠実に職務に打ち込み、ボランティアに連帯して行動していることを私たちは思い起こすのである。

② 竹内 洋『社会学の名著30』(ちくま新書) (361/T11/2)

推奨本(『100冊』)の中にこうした名著のガイドブック・解説書を推薦することに、多少とも違和感があるかもしれない。それはトロイの木馬か、屋上屋を架す的にも思えるからだ。でも推薦者としては100+30、100冊で1.3倍の価値が見込めると主張しておこう。

著者は言う。「いきなり古典、いきなり名著は挫折という危険がいっぱいである。挫折がトラウマになって、古典や名著嫌いになってしまう代償が大きい。」と。名著をそろえた図書館が心するべき指摘ではありませんか？

7万5千冊を有する北野図書館ではあるが、この本が取り上げた30冊の中で、実際に所蔵されているものは下記の8冊【A~H】だけである。つまり22冊はない。後者には少し専門性が高くなってきて、高校の図書館には向かないものもあるからだ。むしろ8冊もあったという点に先達の慧眼を見る思いがする。以下、I~VIIは本書の章立て、下線部は著者による付言である。

I 社会学は面白い…？

A エミール・デュルケーム『自殺論』— 社会の発見あるいは社会学の発見

中央公論新社『世界の名著47 デュルケーム/ジンメル』(908/S16/1-47)

II 近代への道筋

B カール・マルクス/フリードリヒ・エンゲルス『共産党宣言』— 闘争モデルの原型

岩波文庫 (081/I1-5/2b)

C マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』— 近代資本主義と宗教

岩波文庫 (081/I1-5/59-1・2): 大塚久雄訳

日経BP社 NIKKEI BP CLASSICS (331/W1/2): 中山元訳

D ミシェル・フーコー『監獄の誕生』— 顔の见えない監視 新潮社 (361/F4/1)

III 大衆社会・消費社会・メディア社会

E ディヴィッド・リースマン『孤独な群衆』— 羅針盤とレーダー みすず書房 (361/R2/2)

IV イデオロギー・文化・社会意識

F ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』— ナショナリズムの誕生と伝播

エヌティティ出版 ネットワークの社会科学シリーズ (311/A3/1)

V 行為と意味 →→→ この章に含まれている本は蔵書にはない。

VI 現代社会との格闘

G 上野千鶴子『家父長制と資本制』— 二重の女性支配 岩波書店 (367/U2/1)

VII 学問の社会学

H 中山茂『歴史としての学問』— 学問・大学・文明 中公叢書 (002/N1/1)

A~Hも基本的ではあるが優れた内容の本ばかりで、全てが読みやすいとは言えない。たとえばCのウェーバーの著作。価値観の転倒をまさに経験させうる世界史的な名著だと思うが、その壮大で、かつ慎重な文章を上・下巻すいすいと読みこなせる人がどれほど存在するものか？

そこで本書の出番である。現在は本読みの達人といえる竹内氏ではあるが、<安心してください(笑)>。プロローグ【はじめに】の中で、自身の大学1年生(⇒1~3年後の君たち)のときの経験として、ドイツの社会学者テンニース『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の翻訳を読みはじめ、「三分の一もいかないところで、本を開けるのが億劫になった」「まずおもったのは、わたしは頭が悪いのではないか、である。」とカミングアウトしている。ところが挫折したすぐあとに、『近代人の疎外』(パッペンハイム著)をよむことで霧が晴れた。「この本を読んでから、テンニースの本に立ち返ると、以前とはちがって、興味深く読めた(下線は引用者)」という。やはり解説書や入門書で軽いトレーニングをつんでから、あるいはやさしいハードルをこえてから名著の高さにすすむというのは至極順当なのだ。本書が名著を繙く触媒になることを期待したい。

最後に、本書で扱われている名著について、それぞれ二カ所ほど原文(翻訳)からの引用がある。著者が、引用箇所を「素読」してみるのも一興かとおもうと言っているけれど、是非文字を追って声に出して読んでみることをやってみてほしい。理解と味わいが深まっていくのがわかる。